歴史学の用

清原貞雄

歴史学は過ぎ去つた事実を闡明するものである。過ぎ去つた事実は曽て一度起つただけで永遠に消えて二度と帰つて来ないものである。さう云う事を今更鑿索して何になる。斯う云う事は一応考えられる事であり、歴史学無用論が世にあとを絶たない所以である。無用の例として死児の齢を数えると云う諺がある。死んだ子が生きて居れば今年は何歳になる、と云うのであつて、之は全然無益だと云うのである。成る程之は無益かも知れない。然し其の無益と云うのはいくら齢を数えても其の子は生き帰つて来るわけでは無いと云う事である。生き帰つては来ないが、死児を忘れる事が出来ず、何時までも其の齢を数える親心は止むに止まれぬ愛の本能であり、真に貴い親心である。之を実質的の利益が無いと云う理由に依つて全く無益だと云うのは貴い人間性を否定するものである。

歴史学の用の才一は人間の懐古の本能と関連する。人間には懐古の本能がある。個人としては自分の過去を回顧し、或は父母の昔を懐み、祖先の事蹟に興味を持ち、国民としては国の昔を知りたいと思う。之は人間の本能であつて、それを知る事に依つて何か利益を得ようとする事とは無関係に何人もが抱く気持である。此の本能を満足させると云う事を全然無用であると云うならば、それは、すべての芸術は無用であると云うのと同じ事である。

無論史学の用はかゝる本能の満足と云う事に止るものではなく、人間として立派な生き甲斐のある生活を営むためには文字を知る事の必要に次で必要であると云つても過言では無い。学問の種類は多く夫々貴い使命を有つて居るが、必ずしも何人もがその知識を有せねば人間として立派な生活が出来ぬと云うわけでも無い。然るに歴史の知識は何人に取つても必要である。何となれば生きて居る以上生活が必要であり、立派な生活を営むためには、其時の世の中のあらゆる事情に通じて居なければならず、其の時の事情を十分理解するためには其の由て来る所を知る要があり、由て来る所を理解する事は歴史の知識に拠る

他は無いからである。如何なる事象にも必ず原因があり、全然の偶然と云うものはあり得ない。又如何なる出来事にも小は小なり、大は大なり其の結果がある。此の原因結果の系列を究明するのが歴史学の職能である。すべての人が自ら其の究明に従う必要は無いが、少くとも歴史学者の究明の結果を一通り学び取る事は何人にも必要である。それに依てこそ時勢を正しく理解する事が出来、時勢を正しく理解してこそ始めて正しく世に処して行く事が出来るのである。吾々が何か一の方針を立てようとする時は或程度将来に対する見通しが必要である。将来の見通しを立てるには過去に於ける類似の場合が参考になる。歴史は繰返すと云ふ言葉がある。之に就ては議論の分るゝ所で、歴史事実は一回限りで絶対に繰返さぬと云う論と、繰返すと云う論とがある。同一の事実と云う語を最も厳密に解するならば、繰返さぬと云ふ方が正しい。大凡似寄つた様な事実と解するならば繰返すと云えるであろう。過去の史実を探れば、自分の直面して居る場合と類似の場合は必ず見出すであろう。それは之からの方針を立てるに大に役立つであろう。若い者が古老に教を乞うのは同じ意味である。

歴史を知るものは事の変に当つて狼狽せぬ。一例を挙げるならば、大東亜戦争に於て我が国は大敗した。有史以来初めての経験である。而も徹底的の敗戦であつた。国民が呆然自失虚脱状態に陥つたのは無理も無い。二千五百年の歴史を誇る我が国もここに滅亡した、又はすると感じたからである。然し歴史を知るものは尚希望を失わなかつた。一回の戦争に敗れたために滅び去つた例は、古い時代の、所謂国家なるものが一都市の如き小さいものであつた場合は別として、後世の国家の如き大きな機構になつてから以後に於ては見出す事は出来ない事を知つて居るからである。一回の敗戦よりも国民の堕落、道徳の頽廃の方が国家の運命のために恐しい事も歴史を学んだ者は知つて居る。従て敗戦後に於て所すべき道を知つて居るのである。

之は一個人と云う最も小さい事柄の場合である。が反対に最も大きい場合として一国の運命を双肩に担う政治家の場合に歴史知識の必要である事も同様、否一層大きいのである。政治を行うに最も大切な事は、眼前の利害に迷う事なく、百年の大計を立てる事である。其の為には時勢の真相を十分に理解せねばならず、時勢の真相を十分に理解するためには、其の由て来る所を知るを要する。それは歴史知識の問題である。昔の歴史書は政治の鑑戒として書かれた。無論それを歴史学の本義とする

事は出来ないとしても歴史を知らずして大政治家たる事は出来ない。フランスの史家ミセル・ルポンが其の日本文明史の緒論の中に、政治家にして歴史家たらざれば是れ即ち陋劣なる墨守家、若くは昏暴なる革命家なり、と云つて居るのは至言である。徳川家康が周到なる用意を以て幕府を樹立する事に依て類例の少い二百五十年の泰平を招致したに就ては、家康が東鑑を愛読し、源頼朝の政治に学ぶ所大であつた事を知らねばならぬ。歴史を学び治乱興敗の理を詳にする事こそ国政を料理する要諦である。

次に国民精神涵養の問題がある。国民精神と云う言葉は戦時中軍政のために利用、寧ろ悪用せられた面があつて、今も尚此の言葉には反感を抱かせるものがある、又は抱く人があるが、正しい国民精神が健全なる国家のために必要である事は云うまでもない。国民精神とは私の考では国民としての自覚である。国民としての自覚無くして愛国心の生れようが無く、国民の愛国心無くして国家の健全なる発展は望むべくも無い。愛国的情操の基本は国民的自覚であり、国民的自覚は自国の歴史に親む事に依て始めて涵養せられるのである。誤つた国民教育の見地から歪められた日本歴史は別として、真の有りのまゝの日本歴史には決して麗しい史実ばかりで無く、随分忌わしい史実も少くない。かゝる史実を国民が知る事は却て国民の国民的自覚に陰影を与え、惹て愛国心を損いこそすれ決して強める所以とはならないと云う見方もあるかも知れぬ。然し実際は決してそんなものでは無いと思う。自分の親しい人に対しては、仮令其の人に色々の欠点がある事を知つて居ても、全然知らぬ如何なる人に対してよりも親みと愛情とを感ずるものである。国の歴史を全然知らぬとすれば到底完全なる同胞意識は生れようが無く、完全なる同胞意識が無ければ、自分が国民の一人として其の国民全体の中に融け込んで終う事は出来ない。自分が全国民の一員として其の中に融け込んで終う事は、其の国の生い立ち成長、沿革、以て今日に至つた事情を十分知る事に依てのみ出来るのである。之は国民に関する知識の問題である。即ち愛国心の涵養は職として国史知識に俟たねばならぬ所以である。

次に推理力の錬磨が考えられる。実際に起つた史実の量は無限である。其史実は跡方も無く消え去つて居るのであるが、それが曾て在つた事を証明するのが、色々の形で遺されて居る史料である。其の史料も無限と云つてよい程沢山あるが、実際の

史実に比すれば九牛の一毛に過ぎぬ。即ち史実は一瞬の切れ目も無く因果の関係を以て連続して居るのであるが、史料は其の所々が切れ切れに残つて居るに過ぎぬ。それを史実の如く連続した形に復原するには推理が必要である。それは恰も動物学者が古代動物の数個の骨片を研究して其動物の全貌を復原するようなものである。勿論之は専門の歴史学者の仕事であつて一般の人には関係は無いが、推理はかゝる考証に就てだけでなく、史学の本体とも云うべき事象の因果関係を明にして大勢の推移を明にするのも推理に依るのであつて、此の推理は史学者ならぬ一般の読者が史書を読むに当つて要求せらるべきものである。史書筆者の推理に附いて行かない限り、読者は十分に其の史実の真相を把握する事は出来ない。其所に史書を読む事に依つて推理力の涵養せられる所以がある。

次に人間として修養は史を学ぶ事に依つて助けられる事が多い。史書に於て人物に対して毀誉褒貶を加えるのは必ずしも史学の本義ではなく、史家は只事実のありのまゝを叙して其の善悪の批判は読者に委すべきものである。然し其のありのまゝには自ら善悪が現われて居る。読者は之を看取して自ら古人を品評して善に共鳴し悪を憎む。それはやがて自己の反省となり、自己の内にある悪を排し善を鼓舞する所以であつて我々の道徳心向上、人格の陶冶に資する所は大きい。固より倫理を講じ道を聴く事も大切であるが、理解した道徳を実行に移す事は感激の力に待つ所が大きい。感激は実際の善行を聴く事に依てのみ与えらるし、読史が人格の向上に資する所以である。さりとて古人は歴史を道徳教育の道具とせよと云うのでは無い。史学は何物にも隷属すべきものでは無く、それ自ら独立の使命を有して居るのである。史家はありし史実を如実に復原すればよい。それがやがて其のまゝ教訓となるのである。孔子が世道人心の善化のために全力を傾けた仕事は春秋を編纂する事であつた。春秋は王者の善政悪政を有りのまま叙して、後世の鑑戒に資したので、それが後の王者をして善政に就き悪政を慎ましめる最善の道であるとしたのは指導の法を知つたと云うべきである。

次に読史は人をして性急を避け悠然として事の成るを待つ、と云う心のゆとりを持たしめる。人事を尽して静に天命を待つと云う心境は読史に依つて涵養せられる。それは史を学ぶものは世の移り行く大勢を知る。世の移り行きには自ら一種の勢が

あつて、みだりに人為を以て其の勢を遮らんとしても不可能である。人為を以て若干は動かし得ても大きな勢はどうにもならないものである。所謂なるようにしかならないものである事を史実に依て学ぶ。さりとて無為にして運命の翻弄に任せると云うのではない。時の動きに対しては全力を尽して善処し、それ以上は晏如として事の成り行きを待ち、決してもがいたり、あせつたりしないのである。之は史を学んで眼界を弘めて居るものの特権である。

次に批判的の力は歴史的知識に依て養われる。容易に先入主観に囚われて一方的に盲信する事は自己を誤り国を誤る。之は云うまでもなく見解の狭隘から来る。経験に富み見解の広いものは物の見方が多面的である。一の事柄、一の意見に対して決して之を一方的に見て満足せず、必ず他の半面を眺める習慣を持つ。経験とは自分の見聞した事に依て得た知識である。歴史を学ぶものは、其の経験を自己の生活範囲以前に延長する。自己の生活範囲に於ける直接の経験には限度がある。間接ながら史を学ぶ事に依つて得る経験は何程でも拡張せられる。即ち歴史を学ぶものは然らざる者とは比較にならぬ多量の経験的知識を有するわけである。経験は批判の目を養うと云う事が間違でないならば、批判の目は歴史を学ぶ事に依つて最も多く養われると云えるであろう。

以上歴史学の用に就て二、三思いついた事を簡単に述べた。固より之は其の一端に過ぎぬ。其他挙げれば無数に挙げる事が出来ると思うが今は擱く。

以上挙げた歴史知識と反対に、偉大な思想家でありながら歴史知識を欠いたために重大な誤に陥つた一例を挙げて此の小篇を結ぶ事とする。フランス革命に大な役割を演じたルソーがそれである。ルソーは十八世紀に欧羅巴全体に啓蒙思想が勃興して従来のあらゆる権勢に反抗する風が盛になつた時、其の思想を代表し、而も彼は其の啓蒙思想に於ける理智主義の行過ぎを不満とし、人間本性の自由な発現と感情生活の重んずべき事を主張し、理智主義への行過ぎは理智の専制を齎らし、人間本性の自然的発展を抑ゆるものとし、之に対して内部の感情生活を取返す事を主張したので、有名な民約論がそれである。此の書に於て原始時代の自由平等なる世界を謳歌し、文明の流弊を痛撃して、自然に還れと叫んだ。当時の仏蘭西の特権階級の横暴

と文明の爛熟とから来た形式主義の弊害に対する攻撃としては十分に意義のあるものであつたが、之に代るべきものとして主張した所の原始時代への復帰説やギリシヤの小都市時代の国家に行われた民主政治の実行の如きは誤れるものであつた。原始時代が彼の考える如き自由平等の社会でなく、又ギリシヤの如き小都市に行われた民主政治は、社会の進歩し、国家組織の拡大せられた当時に於て到底行わるべきもので無い所の空想に過ぎないのである。ルソーが斯の如き実行不能の空想を敢て主張した理由は、其の歴史に対する無知にあつたのである。即ちルソー程の偉大な思想家でありながら歴史に無知であつたために其の結論に於てかゝる空想に陥つて終つたのである。